鹿児島人物語

# 失われた銅像再建に尽力

乃木静子夫人奉賛会会長

## 平瀬 葉子さん(61) 鹿児島市下荒田3丁目

乃木静子の銅像の前に立つ平瀬葉子さん ＝鹿児島市新屋敷町

「多くの人の協力で、この日を迎えることができた」。陸軍大将・乃木希典の妻で、夫と共に明治天皇の大喪の夜に殉死し、女性のかがみとされた乃木静子。死後に誕生地の鹿児島市新屋敷町に建てられた銅像は、太平洋戦争末期に軍事資材として供出され、長く台座のみが残る状態だった。同じ場所に再建しようと奔走し、11月27日、念願だった建立除幕式を迎えた。当日はあいにくの雨だったが、多くの人が参列し、「感慨深いのひと言。胸がいっぱい」とうれしそうに語った。

鹿児島市に生まれ、鹿児島中央高校を卒業後、東京都の昭和薬科大学に進学。製薬メーカーに就職したが、結婚を機に退職。子育てなどを経て、5年前から再び薬剤師として働く。夫婦で同市下荒田3丁目の老舗銭湯、竹迫温泉も営む。

2012年に乃木希典と静子の殉死100年を節目とした慰霊祭を機に、若手の神職や地元住民らから、銅像の再建を望む声がだんだん高まった。交流のあった宮司から声をかけられ、3年前に立ち上がった建立準備委員会の会長に就任した。「女性の像なので、会長も女性のほうがいいということだったのだと思う。声をかけられた時は、静子夫人について詳しいことは知らず、少しずつ勉強する日々だった」と振り返る。

14年に委員会は「乃木静子夫人奉賛会」となり、銅像建立に向けて、目標金額を1千万円と設定した。天文館で募金を呼びかけるなど資金集めに奔走した。「会員には、高齢の人も多く、動ける人数は限られていた。心が折れそうになることもあった」と、当時の苦労を振り返る。

精力的な活動が実を結び、供出した後、戦後長く不明だった当時の銅像に関する情報も集まった。全国の乃木神社からの寄付などもあって目標金額近くまで、資金も集まった。

6月には新しい銅像と台座を発注した。銅像の粘土型が出来上がった8月、富山県の製作所まで足を運んだ。「形になった銅像に胸が熱くなった」と語る。

銅像は完成したが、「これで終わりではない」と力を込める。「静子夫人の生涯や薩摩の女性としての生き方を、地域の子どもたちにもつないでいきたい」と次を見据える。

(児玉裕子)

ひらせ・ようこ　1955年生まれ。夫の雅和さん(62)と2人暮らし。趣味は津軽